

「敬虔とは何であるか」の問いをめぐって：プラトン『エウチュプロン』

東谷，孝一

<https://doi.org/10.15017/1430723>

出版情報：哲学論文集. 27, pp.59-77, 1991-09-20. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

「敬虔とは何であるか」の問いをめぐって

——プラトン『エウチュプロン』——

東 谷 孝 一

序

人間が自己を神ではないものとして弁えること、またその限りで人間が人間の境位を守り、その場所を逸脱しないことを意味した「敬虔」(τὸ ὀσιον, *eusebeia*)という言葉が、古代ギリシアにおいて重要な位置を占める概念であったことは言うまでもない。だが、ソクラテスが「瀆神罪」(*asebeia*)の廉で告発され刑死したその始終を見とどけたプラトンにとって、「敬虔」という言葉は或るとりわけ重い意味合いを持っていたことであろう。「敬虔に生きる」とはどういうことか、との問いは、プラトンにとってソクラテスの生が何であったのかを知るために、問わざるをえない一つの問いであった。

しかし、そのような事情にも関わらず、「敬虔とは何か」という主題が中心に据えられて探究されている対話篇は『エウチュプロン』というごく短い一篇のみであり、しかも、この対話篇はその展開をそのまま追う限りでは、提示された定義が次々

と論駁されて終るといふ否定的な結末しかもたない。このことにひとは当惑を覚えるかも知れない。その執筆年代において初期のものに分類される『エウチュプロン』以降、一体その問いはどうなったのか。プラトンがこの問いを放棄してしまつたとは考えられない。或いは、この対話篇を書き終えることによつて、プラトンは「敬虔とは何か」の問いに答えるために、以後、何かより遠い道のりを歩みはじめたのであろうか。

—

さて、ここで次のような素朴な疑問が投げかけられることもあるであろう。一体、「敬虔」ということを我々が問題とすることにどれだけの意味があるのか、あるいは、「敬虔」と我々が生きていくということとは、どのような関わりをもつのか、「敬虔」を問題とすること自体に我々が或る意味を感じ取りえないならば、これからの探究も余り実りがあるとは言えない。そこでまず、少くとも、ソクラテス・プラトンにとつて「敬虔」ということは、どのような位相において問題とされたかを確認しておくことはよいことであろう。その位相を如実に語っているものとして印象深いのは『パイドン』の或る箇所である。ソクラテスは言う、

「しかしそれにしても、おそらく君には不思議なことと思えるだろうねえ。これだけがこれ以外のすべてのものちがつて唯一、例外的なことであり、つまり人間にとつて生よりも死のほうがよいというのには、他の事柄のように、或る時にはとか或る人にはという条件がけつてないのは、どうしてなのか——と。そして他方、死のほうがよきものであるのに、そのような人間にとつて、自分でみずからのためを配慮しておこなうことは、けつして敬虔な行為ではなく、いなむしろひとは、そのよき配慮をなしたまう者を、つねに他にまたねばならないとは、これもまた不思議なことと、おそらく君にはみえるだろうね」¹⁾。

「敬虔とは何であるか」の問いをめぐって

即ち、人間にとつて生よりも死がよいことであるのは例外のないことでありながらも、自らに死を強いることは、神にゆゑられざることであり、不敬虔なことである、とソクラテスはそこで語っているのである。そして、これらのことは言論をうけつけないもののように見えながらも、そこには根拠となることわり (λόγος) があるという。それは、「われわれを配慮したまうのは、神々であり、われわれ人間というのは、神々にとつての所有物 (牧畜) のひとつにすぎない」(θεοῖς εἶναι ἡμῶν τοῦς ἐπιμελουμένους καὶ ἡμᾶς τοῦς ἀνοήτους ἐν τῷ κτηνᾶται τοῖς θεοῖς εἶναι) というものであった。⁽²⁾

以上のことから、次のように言うことを許されよう。ソクラテス・プラトンにとつて「敬虔」とは、単に、数ある徳目のうちのひとつとしてとどまるものではない。むしろ、それは、人がこの世に生きることをその最も根底において支えている徳なのであり、そして、「敬虔な生」(ὁ εὐσεβὴς βίος) とは、我々に与えられているこの生を「神々に所有されているもの」としてみつめるその眼差しともにあるものなのだ、と。

このようにみえてくるとき、『エウチュプロン』篇を支配しているソクラテスの問いの持つ意味を或る仕方で窺いえよう。ソクラテスは、全ての敬虔な行為において一にして自己同一な敬虔という形 (ἰδέα) の何であるか、を問うている。しかし、この問いは何か不可思議な理論をあらかじめ前提として問われたのではない。そうではなく、我々に求められていること——「敬虔に生きること」——そのことのために「敬虔とは何であるか」という一なる形への問いが不可欠なのである。なぜなら、もし我々が様々な状況において、或る行為を敬虔であるとしてなし、また、敬虔でないとして差し控えるとしても、そこに語られている「敬虔」というそのことを我々が知っているのでないならば、それらの行為は全く何にも価値がない、否むしろ、敬虔であるとされた行為は不敬虔ですらあるかも知れないからである。⁽³⁾

いったい、我々は敬虔ということを知っているのか、それとも知らないのに知っていると知っているのか——ソクラテスの問いは何よりもまずこの地点に向けられていた。それゆえ、この問いを自らに問うことなしには、我々は「敬虔というそのこと自体」に決して関わることはないのである。そして、「敬虔ということ」に関わりえていないなら、その限りにお

いて、敬虔な生を生きることが、我々にとつてまさに不可能なこととしてあるのである。

さて、『エウチュプロン』篇自身の探究に入る段階に達したようである。その展開をみていくことにしよう。

二

「敬虔」とは何かを知っているがゆえに自分の父親を法廷に訴え出たとするエウチュプロンに対し、ソクラテスは問う、「敬虔とは何であるか」。エウチュプロンは自信にみちて応ずる、「敬虔とは私がいまなしているそのこと、不正をなす者を訴えることであり、訴え出ないことが、不敬虔である」(5D8-E2)。

ここでは、むしろエウチュプロンは自分が敬虔だとする諸々の行為のうちの一部分を提示しすぎず、「すべての敬虔な行為において一なる形」を問うたソクラテスの問いに正しく答えていない。それゆえ、この定義は、多くの敬虔なものの中の二つ二つではなく、敬虔なものがすべてそれによつて敬虔であるその形そのもの (*aitrō tō eidos ē nautā tā oīa taia eōtin*) を教えよ (6D9-11) というソクラテスの言葉により、その不適切を指摘され、対話篇は第二定義の提示をまつことになる。だが、ここで注目すべきことは、この第一定義は或る背景とともに語られていたことなのである。即ち、世の人々は、ゼウスが最もすぐれた最も正しき神 (*apīstov kai dikaiōtarov*) であること、またそのゼウスが自分の父神をその不正のゆえに縛つたことを認めているとし、それらのことからエウチュプロンは自分の行為こそが敬虔なものであると主張するのである。

我々は、ここに「敬虔」をめぐる一つの思考をみてとることができよう。つまり、エウチュプロンにとつては神話にみられるような神々の振舞いにおいてこそ正義 (*dixn*) は実現されているのであり、従つて、神々の振舞いを言わば規範として人が行動するとき、その者は神々において定まれる正義を遵守し、敬虔になしているとされる。このような思考に沿う限り、

神話にみられる如き神々の振舞いに関する個別的・具体的知識をもたない者は、敬虔な行為をなしえないこととなる。その者は、守るべき神々の正義を知らないことになるからである。

このようにエウチュプロンにとつては、神々についての諸々の具体的知識と敬虔・不敬虔の知は切り離しえない。神々に関する諸々の知識こそが、我々に敬虔・不敬虔の知を約束する——これがエウチュプロンの内に一貫してある思考なのであり、「神々のことを知る者」としての彼の自負もまたここに淵源を有しているのである。

しかし、我々はこの見逃してはならない。確かに、ソクラテスは自らが神々については不知であると認めていた。しかし、にも関わらず、エウチュプロンの神々に関する知識、即ち、神々が互いに敵対し、憎み合うなどの事柄をソクラテスはそのまま承認しようとしてはいないのである。⁽⁴⁾このことが持つ意味は、恐らく小さなものではないであろう。即ち、それは単にエウチュプロンとソクラテスの間で神々についての表象が異なっていた、ということではないであろう。むしろ、エウチュプロンは、「敬虔」についての彼の把握の仕方の故に、神々について表象し、像を描かざるをえなかったのではないかと思われる。我々は以下において、この問題に触れることとなろう。

三

「神々に愛されるもの（ひと）が敬虔であり、憎まれるもの（ひと）が不敬虔である」(7A6-8)

この第二定義は、エウチュプロン流の仕方で第一定義を一般化したものと見てよいであろう。神々とは、その諸々の振舞いにおいて正義を具現している存在、言わば人間にとつての規範的な存在であり、それゆえ、そのような神々に愛されること（＝善しとされていること）こそが、敬虔なことであるとエウチュプロンは考えていると言えよう。

では、この第二定義が如何なる吟味を受けたのか、その過程(7A6-8A12)を見ることができた。

まず、エウチュプロンによれば、神々は争い合い、意見を異にし、互いの間に敵意 (*érgōa*) があると云う。そこでソクラテスは問う、「敵意や立腹とは、何についての意見の相違が生むのか」(7B6)。その相違が、例えば、数の多少や、もの的大小に関してであれば、我々人間でさえも、相応の手段に訴えて和解するであろう。従つてもし、神々が敵対し合うとするならば、それを生む意見の相違は、「正・不正 (*dikaion·adikon*)」「美・醜 (*kalón·aischron*)」「善・悪 (*agathón·kakón*)」に関してであるとせねばならない。即ち、或る神々と別な神々とは、それぞれ異なるものを正しいと思ひ (*phōntai*) (7E2)、美醜や善悪に関しても同様であることになる。ところで、神々はそれぞれ、美しく善く正しいと思うそのものを愛し、それと反対のものを憎むとすれば、同一のものが或る神々によつては愛され、また別の神々によつては憎まれることになる。ところが、エウチュプロンによれば、神々に愛されるものが敬虔なものであり、憎まれるものが不敬虔なものであるから、敬虔なものはそのまゝ不敬虔なものであることが帰結する。

さて、以上の論駁は、その形態を概観する限り、エウチュプロンの抱く信念間の不整合を露呈させたものと言えよう。即ち、エウチュプロンの神に関する見解が含蓄することからと定義とをつき合わせてみた場合、敬虔なものはそのまま不敬虔なものでもあることになり、矛盾が生じているのである。

しかし、問題はそれだけではない。この論駁を見るとき、我々は或ることに気付くであろう。即ち、この論駁の過程で神々に関して語られている事柄は、そっくりそのまま我々人間の生の現状が投影されたものなのである。第二定義が失敗したここでの直接の原因は、神々に愛されるもの || 神々に憎まれるものであったこと、即ち、神々において愛されるものが相反したからである。しかし、正・不正、美・醜、善・悪についての見解の相違ゆえに互いに愛するものが相反し、憎悪しあわねばならない悲惨な生は我々人間の生の現状に他ならない。そして何よりも重要なことは、それらの争いや憎悪は、正・不正などの言わば「最大のことから (*tá mélyōta*)」に関する人間の不知の不知 (|| 知らないのを知っていると思ふこと) に端を発していることなのである。なぜなら、善悪などに関して我々が不知であることそれ自体は、我々の間に憎悪や争いを生

むものではない。そうではなく、それらの事柄を知らないのに自分では知っていると思つてゐるが故にこそ、我々は憎み、争ひ合うのだからである。つまり、憎悪や争ひは、最も大切な事柄に関する我々の全く混濁した思い做しに起因しているのであり、その限りにおいて、我々の生が正に劣悪なものであることをはっきりと示すものだったのである。

従つて、エウチュプロンの抱く神々の像とは、エウチュプロン自身の不知の不知を神々に移しただけのものなのであり、それがそのまま神々の間における愛されるものの相反という形で姿を現わしているのである。ソクラテスには、このことがみえていた。それゆえ、エウチュプロンが神々について語ることをそのまま受け入れようとはしなかつたと見えよう。⁽⁵⁾

さて、ここで、これ以上エウチュプロンが抱く神々についての見解について云々すべきではない。あくまでも、問題は「敬虔」に関するエウチュプロンの思考形態なのであり、すなわち、神々について知識をもつことによつて「敬虔とは何か」を知ることになる、というその思考である。

対話篇の展開に視点をもどそう。ソクラテスによつて吟味され、第二定義の失敗が明らかになつたとき、エウチュプロンはひたすら自分が行つてゐること——父親を告発する——の正当化をはかろうとして主張する。かりに神々が正・不正などに関して意見を異にすることがあろうとも、自分がいま行つてゐることに關してなら、すべての神々がそれを正しいこととみなすその証拠 (testimony) を極めて明瞭に提示しうらさう (9A1-B3)、と。この主張は根拠のない臆断であると言わねばならない。なぜなら、エウチュプロンの自負する神々についての個別的・具体的知識のいかなるものをもつてしても、すべての神々がエウチュプロンの所業を正しいとみなすことは保証されないからである。にも関わらず、それができるとするとき、エウチュプロンの言う「神々が正しいとみなすもの」とは、実は「神々が正しいとみなす」とエウチュプロンがみなすもの⁽⁶⁾なのである。エウチュプロンは、自分の視点＝神々の視点という仕方、自分と神々の立つ位置を同化させてしまつてゐるのである。

四

第二定義は次のように修正を加えられる（これを第三定義とする）。

「すべての神々が愛するものが敬虔なものであり、すべての神々が憎むものが不敬虔なものである」（9E1-3）

この定義は、第二定義の吟味の過程で顕在化したエウチュプロンの信念間の不整合を言わば解消したものと言えよう。従って、エウチュプロンの抱く神々についての見解が、かりに矛盾を生まないものとして、その「敬虔」に関する考え方が保持できるか否かが吟味されることとなる。つまり「神々に愛されるものこそが敬虔なものである」とするその思考そのものもつ問題が問われているのである。

さて、この第三定義に対するソクラテスの吟味の結論は次のようなものであった。

「どうやら敬虔なものとは一体何であるのかとたずねられているのに、その *osotia* を明らかにする気はなくて、それに關する一つの *paigos* の方を言ってくれているようだ」（11A6-9）

つまり、ソクラテスは「神々に愛されるものが敬虔なものである」とする立場は「まさに敬虔であるというそれ自体 (*osotia*)」には全く触れずに、「敬虔なもの」が受けとることがら (*paigos*) を語っているようだ、と言っているのである。周知の通り、この第三定義の論駁部分 (10A-11A) に関しては、そこで展開されている吟味のプロセスの論理的構造、整合性、延いてはここでのプラトンの思索のもつ意味について、従来、多くの議論がなされてきた。そして、恐らく、この論駁部分は『エウチュプロン』篇全体を読み解く上での、最大の鍵をにぎっているものと言えよう。ここで、それらの議論全てにたち入り、評価を下すことはできない。むしろ、私はこの 10A-11A の論に関して、最も有効と思われる解釈を提示し、この論のもつ意味を問うこととする。

「敬虔とは何であるか」の問いをめぐって

さて、ここでまず従来の解釈のうちから、代表的なもの目される解釈を一つ紹介し、それとの対比において私の読み方を提示したい。それは Allen の解釈である⁽⁸⁾。

1 エウチュプロンが第三定義を放棄するよう追い込まれたのは、次の二つの命題を承認したからである、と一応言えよう。

(α) 「神々に愛されるもの」は、神々に愛されるから「神々に愛されるもの」なのであって、「神々に愛されるもの」であるから愛されるのではない (10E5-7)。

(β) 「敬虔なもの」は「敬虔なもの」であるから神々に愛されるのであって、神々に愛されるから「敬虔なもの」なのではない (10E2-3)。

すなわち、「敬虔なもの」(τὸ δόσιον) が「神々に愛されるもの」(τὸ θεοφιλέν) と同一であるならば、(α) の命題の「神々に愛されるもの」を「敬虔なもの」で、また(β) の命題の「敬虔なもの」を「神々に愛されるもの」で置き換えることが可能なのであるが、実際そのような操作を行なった場合、各命題間に矛盾が生じるからである。

さて、それでは(α)(β) の命題はどのような仕方エウチュプロンに承認されるに至ったのであろうか。

まず、(α) に関しては、その過程として次のような論を見て取ることができる。

(1) 我々は「運ばれるもの (φερόμενον)」と「運ぶもの (φέρων)」、「導かれるもの (ἀγόμενον)」と「導くもの (ἀγών)」などが互いに別なものであり、どんな意味で別なのかわかっている。そして、そのことは「愛されるもの (φιλοῦμενον)」と「愛するもの (φιλοῦν)」についても同様である (10A5-12)。

(2) 「運ばれるもの (φερόμενον)」は運ばれる (φέρεται) がゆえに「運ばれるもの」なのであって、「運ばれるもの」であるがゆえに、運ばれるのではない。また、同様のことは、「導かれるもの (ἀγόμενον)」なども言える (10B1-11)。

Allen は、この議論でソクラテスが示そうとした事柄を次のように解釈している。すなわち、ここで問題となっているの

は、受動形分詞 passive participle と、その動詞の受動形 corresponding passive verb との対比なのであり、ソクラテスはそこで、「事実の構造における優先性 (a priority in the structure of fact)」を示しているのだと。そして、次のように結論つける。

there are activities, such as carrying, and there are counterpart properties engendered by those activities, such as being carried; the counterpart properties exist because of the activities, but the activities do not exist because of the counterpart properties.^(a)

Allen の主張は明白である。例えば、何かを「運ばれるもの (πεφορευον)」であるためには、「運ばれる (φεραται)」ということがなければならず、「運ばれる」ということがあるためには「運ぶ」という activity が先立っていないなければならない(ただし、その priority は、temporal なものではなく、conditional) と言うのである。^(b)従って、「神々に愛されるもの」も同様に「神々に愛される」というそのことによつて、それであることが保証されているわけなのであり、こうして (a) の承認は基礎づけられているとされる。

では、(b) についてはどうか。Allen はこの命題を承認することは、エウチュプロンの立場としては、言わば自殺行為である、という。つまり、Allen はエウチュプロンに「神意主義 (theological voluntarism)」をみようとしていたのであり、その「神意主義」とは、Allen によれば、我々の行為などに関して、それらがよきものである根拠は神がそれらを意志するというそのことのみに求められるのであり、神自身もその意志とは別によきを認知しているわけではないという立場である。そして、次のように結論が下される。エウチュプロンが (b) を承認したのは、常識の力が強く働いたからなのだ。⁽¹⁾と。つまり、(b) を承認せず、「敬虔なもの」は神々に愛されるから「敬虔なもの」なのだと言張することは、神が何かを愛する場合に、そこに何の理由も働いていないと主張することに等しく、それは我々の常識に反するが故に (b) は承認されたのである。しかし、このような解釈は正しいであろうか。

2 Allenの解釈の欠点は、プラトンがこのような常識の力にたよって論証を行なったか否かは別にしても、何よりもまず、その解釈が10A-11Aで展開されているプラトンの論の運びに合致していないところにある。Allenの解釈では、(a)と(b)はそれぞれ全く別の論拠に基いて承認されていることになる。しかし、そもそも(a)に関する論(1)、(2)が、ここで展開されねばならなかったのは、エウチュプロンが、ソクラテスの最初の問い、

(0) 敬虔なものは敬虔なものであるから神々に愛されるのか、愛されるから敬虔なのか(10A1-2)。

の意味を解しえなかったからである。従ってこの問いが再び取りあげられる箇所(10D1-4)までの(a)に関する論は、この(0)の問いにエウチュプロンが答えうるために効力あるものとして読まれねばならない⁽¹³⁾。そして、そのように読むことは可能であると思われる。

Allenの(1)(2)に関する解釈はその大筋においては誤ってはいない。しかし、(1)(2)を含む10A5-C12の論は、はるかに強力なものなのである。そして、そのことはプラトンが「運ばれるもの」や「愛されるもの」の身分を「受動しているもの *πάσχειν*」あるいは「生じるもの *γινώμενον*」として語っている点にみられるのである。では、それはどういう意味を持つのか。

(1)において、「愛するもの *φιλοῦν*」と「愛されるもの *φιλώμενον*」が異なることが確認された。そして、この文脈においては、「愛するもの」とは神々であり、「愛されるもの」とは我々人間、またその行為であると「応言えよう。ここに見られる両者の立場の別は厳密に守られなければならない。つまり、我々は徹頭徹尾受動の立場にあるのだ。

さて(2)において示されている如く、「愛されるもの」とは「愛される」というそのことよって、その成立を保証されているのであるから——即ち、我々の行為は「神々に愛される」ことよって「愛されるもの」としてあるのだから——「愛されるもの」の成立に関しては、我々人間は一切関与していないことになる。つまり、「愛されるもの」とは、我々人間の関与を一切断ち切った所で成立するものなのであり、我々にとつては正に「生じるもの *γινώμενον*」なのである。

このように、「愛されるもの」とは、神々によつて「愛される」ということのみによつて、その成立を保証されているもの

であり、我々にとっては正に「生じるもの」であることが明らかとなったいま、命題(α)に関する論は、命題(β)の承認に向けて強い効力を有していると言わねばならない。というのも、もし、エウチュプロンが、「敬虔なものは、敬虔なものであるから神々に愛される」と主張せず、「敬虔なものは、神々に愛されるから敬虔なもののだ」と主張したとすれば、如何なる事態が生ずるのであろうか。そのように主張することは、「敬虔なもの」を「運はれるもの」や「愛されるもの」と同様な「受動するもの」「生じるもの」とすることなのであり、従って、「敬虔なもの」とは、我々の関与が一切断られたところで成立するもの、我々のなしえないものとなってしまふのだ。

ここで、ひとは次のように反論するかも知れない。神々によって愛されるのは、我々の個々の行為なのであり、従って我々は関与している、と。しかし、この反論は無効である。「敬虔なもの」が「敬虔なもの」であることが「神々によって愛される」というただその一事に懸っているのであるなら、たとえ我々が何をなさそうとも、敬虔であるというそのことには我々は決して関与していない。「愛される」とは、まさに *παθητικῶς* (受動) だからである。しかし、「敬虔」とは、我々の行為、なすというそのこと自体に一定の形を与えているもののはずである。つまり、我々のなす行為が、その行為自体において「敬虔」という形 (*εἶδος*) をもっていなければならないのである。

従って、(α)に関する論 (10A5-C12) は (β) の承認へ到るプロセスを示す論でもあったと言えるのである。

3 これまでの我々の考察により難解で正体のとらえにくいものとされてきたこの 10A-11A の論は光をあてられ、我々はいまやその真相をとらえつつある。

まず、我々は、この一連の論の口火を切る役割りを果たし、また同時に論の中核をなしているソクラテスの最初の問い——(0)敬虔なものは敬虔なものであるから神々に愛されるのか、愛されるから敬虔なものなのか——の意味を確認することから始めたい。一見すると不可解なもの映るこの問いの意味も、それを説明するために展開された(α)に関する論の我々の解釈によって明らかであろう。即ち、何よりも、この問いの要点は次なる選択肢を提示することにあつたのである。

「敬虔とは何であるか」の問いをめぐって

(イ) 「神々に愛される」というそのことに依存することなく「敬虔なもの」が「敬虔なもの」であることは定まっているのであるか、それとも

(ロ) 「神々に愛される」ことが「敬虔なもの」が「敬虔なもの」であることを定めているのか。⁽¹⁴⁾

そして、プラトンは、この(ロ)の問いがエウチュプロンによって理解されなかったため、(α)に関する論を用いてその意味を説明した。即ち、*πάσχειν* していることによってその成立を保證されているもの (*πάσχειν*)、そして *πάσχειν* である限りにおいて生じているもの (*κλυθόμενον*) として、「運ばれるもの」や「導かれるもの」、「また「愛されるもの」をとりあげ、もし、「敬虔なものは神々に愛されるがゆえに敬虔なものである」とするなら、「敬虔なもの」とは、*πάσχειν, κλυθόμενον* であることになるが、そのようなことは承認されうるのか否かを問うたのである。そして、その限りにおいて(α)に関する論は同時に(β)の承認を基礎付けるもの、すなわち(ロ)をしりぞけ(イ)を選ばせる役割りをも果たしたのである。

さて、「神々に愛される」ことに依存することなく「敬虔なもの」が「敬虔なもの」であることが定まっている、と論定された以上、「敬虔なものとは神々に愛されるものだ」とするエウチュプロンの定義は、はっきりと退けられねばならないことになる。なぜなら、「敬虔なもの」が「敬虔なもの」であること、自体には全く無関係な「神々に愛される」ことによって「敬虔なもの何であるか」を語ろうとしていることになるからである。従って、エウチュプロンが答えたものは、*οὐδία* に全く触れないまま、*νάσχειν* のみを語っていたものなのであり、即ちそれは、定義ではなく、単に「敬虔なものは神々に愛される」という主張にすぎなかったといえるのである。⁽¹⁵⁾

4 さて、この論駁から我々が字ぶべき事柄は決して小さなものではない。なぜなら、それは、「敬虔とは何か」を問う我々の探究が向かうべき方向を（或る否定的な仕方で）明確に示してくれているからなのだ。

まず、我々が注目しなければならないのは、この論において、一方では「敬虔なものは神々に愛されるものである」との

定義は完全に退けられていて、他方「敬虔なものは神々に愛される」という主張は一応容認されている点である。実際、我々にも、「敬虔なものは神々に愛される」という主張自体は誤ったものとは思われぬ。しかし、大切なことは、仮りに「敬虔なものは神々に愛される」との主張が我々に承認されるものだとしても、我々はそこから、「敬虔なものは神々に愛されるものである」という定義に決して *stop* してはならない、ということなのである。なぜなら、我々が「敬虔なものは神々に愛される」と思うとき、「敬虔なもの」それ自体の何であるかは、我々には全く明らかになっていないままにそう思っているからである。

「敬虔なものは神々に愛される」との思いは、それが思いでしかなく、我々が認めている限りでは、正しいとしてよいかも知れない。しかし、その思いの強さのゆえに「敬虔なもの」の何であるか、を問うことなく、「敬虔なもの」神々に愛されるもの」とし、そして、そこからどのような行為が神々に愛され、喜ばれる行為なのかを知れば、敬虔な行為を知ったことになる、と我々が考えるとき、我々の思考は正に転倒していると言わねばならない。というのも、そのような思考に沿う限り、我々にとって問われるべきことは「敬虔な生とは何か」であるにも関わらず、「どのような生が神々に愛されるのか」が問われることになり、神々の立場から人間の生をみるという、言わば虚構の視座を我々は設定せねばなくなるからである。そして、その視座が正に虚構でしかないのは、そもそも我々にとって、神々の立場というものの自体が、結局は我々の恣意的な想定によってしか設けることができないものだからなのである。¹⁶⁾

エウチュプロンのうちでは、「敬虔なものは神々に愛される」から「敬虔なもの」神々に愛されるものへの *stop* が起こっていたと思われる。そしてこの *stop* のゆえに、即ち、「敬虔なもの」を「神々に愛されるもの」として知っているとするとその知の思いのゆえに、エウチュプロンのうちでは、「敬虔」というそれ自体を問うてゆく道が閉ざされ、言わば逆に神々に関する知識を求める方向へと向かわざるをえなくなっていたのである。

五

第三定義が論駁されたもののエウチュプロンは探究の堂々めぐりが、自分自身の立場に起因するものとは考えていない⁽¹⁷⁾。つまり、エウチュプロンには、何か容易に抜き去りえない仕方、「神々に愛されるものが敬虔なものだ」という思いが深く根をおろしていたのであり、事実、この対話篇が幕をとじる場面においてもなお、その呪縛からのがれることができなかった⁽¹⁸⁾。なぜなのか。

それは、エウチュプロンにとって、「神々に愛される」ということが重大な意味をもっていたからである。つまり、我々人間に何らかの実利あるいは実害を与え、そのような仕方でも人間の生を支配するものとしての神々の存在は、そもそもエウチュプロンという人物にとつて、敬虔・不敬虔が重大な関心事となることの言わば基盤であり、その出発点となっていたのである。そして、このような描きを許したものは、先に見たごとく（二章を参照）、「正義とは何か」を問うことなく、神々の個別・具体的な振舞いのうちに「正義」が範型化されているとしたエウチュプロンの思い做しであると思われる。

確かに「敬虔 (*eusebeia, to eorou*)」という言葉には、人の神への関わりが示されていると言えよう。しかし、我々は改めて問わねばならない。一体、「敬虔とは何か」が我々に問われているとき、

(a) 我々の生きていることが既に何らかの神々と関係があるものと想定された上で、如何にうまくその神々と関わっているのか (how to) が問われているのか、それとも

(b) 我々は一体どこで、神的存在を認めそれを認める者としての生を生きることになるのか、
が問われているのか。

エウチュプロンは、(a)の仕方でしかこの問いを解しえなかった。なぜなら、先に述べたような仕方では神々と人間との間に関係があることは、エウチュプロンに前提とされていたからである。しかし、(a)の仕方では我々が「敬虔」を問題にするとき、「敬虔なものは神々に愛される」という思いから「敬虔なもの」神々に愛されるもの」という思考への不当な移行が、既に我々のうちで不知不識のうちに起こっているのである。つまり、そもそも「敬虔」ということを「神々に愛されるもの」という仕方でしかとらえることができなくなっているのである。

では、(b)の仕方では、即ち、いかなる想定も混入させることなく、「敬虔というそれ自体」を純然と問うための道は如何にして開かれるのか。

そのための糸口は、この対話篇における、言わば第二の探究過程 (11E1-15C10) の出発点となったソクラテスの次なる問いに見いだされると思われる。

「敬虔なものは、すべて必然的に正しいものでなければならぬと思われまいだろうか」(11E4-5)

つまり、ソクラテスはここで「敬虔」を「正義」との関わりにおいて問うていこうとしているのである。このことの意味は大きい。なぜなら、それは、ややもすれば、「敬虔」ということが(a)の仕方では我々に取り扱われそうになることに歯止めをかけ、それを真に我々の生きること・なすことそれ自体に関わる問題として担いなおすための道だからである。

しかし、この第二の探究はエウチュプロンのうちで自明なものとして前提とされていた「正義」の觀念のゆえに全く逸れた道を辿ることとなった。つまり、エウチュプロンにとって「正義」とは最も通俗的な意味でのそれ、即ち、他者との公平な取引を成立させるもの(交易術 *εμπορικὴ τέχνη*)¹⁴⁵ ほどの意味しか持っていなかったのである。このように、「正義」が言わば他者に対する関わり方を規制するものでしかないとき、「敬虔」を「正義」との関わりにおいて問う道は挫折し、探究の糸は切れてしまう。それゆえ「敬虔とは何か」という探究が我々のうちで展開され続けていくためには、我々にとって「正義」とは一体何であるのかが問われねばならないのである。¹⁴⁹

「敬虔とは何であるか」の問いをめぐって

こうして、プラトンは『エウチュプロン』篇を書き終えたのち、「敬虔とは何か」を問うために、「正義」の問題へと向かっていったのであり、言わばより遠い道のりを歩みはじめたのだと思われる。

しかし、では、プラトンにとって「敬虔」とは「正義」の問題に全面的に還元されてしまったのであろうか。つまり、「正義とは何か」を問うとき、「敬虔とは何か」の問いはそこに還元され不要なものとなったのであろうか。そうは思われない。この対話篇の中で、ごくさりげない仕方でもソクラテスによって語られた次の言葉は、我々に深い響きを与える。

「我々にはよいということは何一つとしてない、神々が与えるのでないものとしては (*oûdèn hūtu eōtin dyadōn ōti dū jū ēkēnuōi dōstū*)」(15A1-2)

即ち、「敬虔」ということには、我々の「よいということ」への関わりが問題化されているように思われる。「よい」というそのこと」を神に与えられたものとして我々がみとめるとき、我々の生は真に「敬虔な生」としてかたちづくられていくのではないかと思われる。

註

- (1) 『バイドン』62A2-8 訳は岩波版プラトン全集の松永雄二訳による。
- (2) 『バイドン』62B7-9
- (3) 『エウチュプロン』篇の結末部においてソクラテスによって語られる印象深い言葉 (15D4-E1) を参照。
- (4) 6A6-9のソクラテスの言葉を参照。
- (5) このように我々の不知の不知を神々に帰することこそ、「神々をつくること」と呼ばれるべきであろう。しかし、この「神々をつくる者 *ποιητής θεῶν*」(3B2)という譏りは、皮肉にも、「神々のことを知ることを何よりも大切にしてきた」ソクラテスに向けられていたのである。

- (6) この同化は、次章でとりあつかうソクラテスの吟味によって、或る仕方で分離される。
- (7) これらの論争の皮切りになったのは、J. H. Brown, "The Logic of the Euthyphro 10A-11B", *The Philosophical Quarterly*, Vol. 14, 1964, p. 492。
- (8) R. E. Allen, *Plato's 'Euthyphro' and the Earlier Theory of Forms*, Routledge & Kegan Paul, 1970
- (9) Allen, *op. cit.*, pp. 40-41.
- (10) Allenはこのポイントを次のようなことと混同しながら警告している。それは、「一般に activity は object を要求するといふものである。つまり、例えば、牛から乳を搾るには、牛がいなければならぬわけだから、牛の方が搾乳の condition だ」との主張である。しかし、Allenは言う、「搾乳されている牛」がいるには搾乳が行なわれていなければならない。従って搾乳は「牛が搾乳されている牛」によってあるための condition である。cf. Allen, *op. cit.*, pp. 40-41.
- (11) Allen, *op. cit.*, pp. 44-45.
- (12) このことはテキスト上に裏付けられている。ソクラテスは 10A5 で「より明瞭に説明するよう努めよう」と言っているのである。
- (13) Allenはこう読みえなかった。ゆえに、(9)の承認に関して「愛する」ということの文法を援用してその根拠を与えねばならぬ。なり、神意主義の問題を巻き込んでしまったのである。
- (14) (a) の問いのうちの一方の選択肢(A)「敬虔なものは神々に愛されるから敬虔なものなのか」が(b)の意味での問いであることは、(a)に関する論の我々の解釈によって明らかであろう。他方、(B)「敬虔なものは敬虔なものであるから神々に愛されるのか」に関して言えば、S. M. Cohen はこの「から(ōtz)」を reason- "because" と考え、(B)の選択肢の眼目とは、「何故に神々が或るものに対して愛する」という態度を取ったかの理由 (reason) を示す点であると解している。cf. S. M. Cohen "Socrates on the Definition of Piety: Euthyphro 10A-11B" in G. Vlastos (ed), *The Philosophy of Socrates*, University of Notre Dame Press, 1971. Cohen の論文に顕著なように、従来の幾人かの解釈者は、(a)の問いの意味を明晰化するために、そこでの ōtz の意味を確定する方向へ向かった。しかし、ōtz をどう解釈するにしても、(A)と(B)が incompatible なものとして読まれなければ、プラトンの論にはそぐわない。なぜなら、10D4-7 において(B)から non (A) が導出されているからである。そして、そもそも(a)の問いが選

扱を迫る問いとして機能しないであろう。Cohenの論はこの点で不十分である。あくまでも(B)のポイントは「敬虔なものは敬虔なものであるから神々に愛される」と人が認めるならば、その人はそこで *gott* をどう解しているにせよ、「愛される」ことに依存することなく「敬虔なもの」は「敬虔なもの」としてあることを認めねばならない点にあるのである。

(15) もし、「敬虔なものとは神々に愛されるものである」を定義として認めた場合、それは(II)の立場をとることになる。

(16) 三章において、エウチュプロンにおける神々の視点とは語る所、彼自身のものの見方の投影でしかないことを我々はみたのであった。

(17) このことは本篇の *Digression* とも言える II B6-E1 におけるソクラテスとエウチュプロンの対話の意味であろう。とりわけ C8-D1 を参照。

(18) エウチュプロンによる最終の定義が、その外形を変えてもなお「神々に愛されるものが敬虔なものだ」との主張に帰することが確認されて、この対話篇は幕を閉じる。15B を参照。

(19) この論文において「正義」に関するプラトンの思索を追うことはできない。ただ、付言しておくとするれば、プラトンが「正義」ということで問題としたものは、個々の人間の他者への外的な関わり方ではない。否むしろ、「正義」とは、究極的には、我々ひとりひとりの内的な行為に関わり、真に自己自身と自己自身のことに関わるものとして捉えられていたのである。【国家】43C、D を参照。

(本学大学院博士課程・西洋哲学史)